

# はじめての簿記の遠隔授業に関する振り返り

西 舘 司

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 簿記の遠隔授業
- 3 おわりに

## 1 はじめに

2020年度は、コロナ禍という未曾有の事態によって、初の遠隔授業を余儀なくされた。小稿では、過去1年間を振り返り、遠隔授業を行いながら私が感じたことや考えたこと、凝らした工夫などを備忘的に書き記すとともに、課題を指摘したい。この小稿が何らかの形で教員間の情報共有に資すれば幸いである。

## 2 簿記の遠隔授業

2020年度春学期の授業は手探りの状態で始まった。オンライン授業・会議システムであるMicrosoft Teamsはまだ導入されていなかったため、既存の学内連絡ツールであるWeb Campusを使用し、教材や課題(図1および2参照)を受講生に一斉送信するという方法で授業を行わざるを得なかった。しかし、その方法はすぐに改められた。課題の解き方や解説について、個別の質問がメールにより多数寄せられたためである。私は主に簿記の科目を担当しているが、初めて簿記を学ぶ学生には、書面による説明だけでは、何をどうして良いやら分からなかったようである。そこで、「実際に手を動かし、解いて見せる」ということが必要だと思い、すぐさま書画カメラを取り寄せ、動画を撮って配信することにした。撮った動画は編集し

てYouTubeにアップした(図3参照)。撮影準備からアップまでの一連の作業は、初めての試みということもあって、かなりの時間と手間を要したが、問題を解いて見せながら解説もする動画はそれなりの好評を得たように思う。また、YouTube動画は再生速度を自由に調整でき、あるいは途中で止めたり、重要な場面だけを見返したりできるので、そう言った意味においても、便利な教材だったことだろう。

課題はPDF形式で配付した。直接入力できるWordやExcelの形式を希望する声もあったが、PCやiPadなどの小さな画面では、一度に捨える情報量に限界があり、問題を素早く正確に解くのに支障が出るという理由、ならびに、書くという行為が記憶の定着をサポートするという理由から、あえて印刷が必要なPDFで配付した。

印刷代を受講生に強いることになってしまうため、PDFでの配付には、それなりの抵抗感があった。しかし、遠隔授業を支援する学生給付金が大学から支給されることになってからは、多少の金銭的負担もやむなし、とも考えるようになった。

成績は、毎回の課題の取り組み状況とペーパー試験(中間と期末の2回実施)の点数の総合で付けた。

簿記の学習到達度を測るうえでは、総合的な計算問題を解けるようになったかどうか極めて重要であるから、ペーパー試験の実施は必要不可欠である。しかしながら、遠隔授業下にお

いては、受験状況を監視できないため、いわゆる「持ち込み可」(試験中、何を見ても構わないということ)を認めざるを得ない。そのような状況で十分な受験時間を与えてしまえば、100点答案が続出してしまふ。さらにいえば、複数人で協力し合う、真っ先に解答し終えた者から100点答案を一斉送信してもらうなどといったことが、やろうとおもえば出来てしまふ。そうなれば、合否の判定はもとより、成績(AA~E)のランク分けを行うことができない。

これには非常に悩まされたが、他の教員から知恵を借りつつ私の出した答えは、時間内に完答することが難しいようなボリュームのある問題を解かせ、かつ答案の提出時刻が遅くなればなるほど採点の上限を引き下げる、というものであった。後者について詳しく言えば、試験時間を60分としたうえで、35分以内に提出した場合には、100点満点で採点し、それ以降に提出した場合には、5分刻みで採点の上限を5点ずつ引き下げる、という採点方式をとることとした。60分をフルに活用した100点答案が出てきても、75点とするのである。また、これに加えて、問題を複数パターン用意し、解答する問題を学籍番号の下1桁の数字で指定した(複数パターンといっても、数字を変えたり、設問の順番を入れ替えたりする程度しかできなかったが)。こうすることで、学生が協力し合ったり、出来る者が他人に教えたりするような不正行為を、それなりに防ぐことができたのではないかと思っている。もちろん、試験にあたり、こういった不正行為は紳士淑女協定に反するものとして禁じておいた。

試験問題は、開始時刻にWeb Campusから配信した。これとあわせて、Web Campusの万一の不具合に備え、私個人のホームページにもアップした。解答用紙については、プリンターを持っていない学生に配慮し、余裕をもって事前に送付するようにした。解答に関わる数字や勘定科目はなるべく問題用紙のほうに記載し、事前に解答できないよう工夫した。

秋学期に入ると、大学からの指示により、Microsoft Teamsを使ったオンライン授業に切り替わった。ライブ型の授業になったことで、多少なりとも緊張感のある授業が行えるように

なった。授業では、たびたび問題を解いてもらい、そのつど解答し終えた学生に「挙手」してもらった。これは、学生の理解度や作業の進捗度を把握することに加えて、ライブ感を出して受講生に緊張感を与えることにも役立ったように思う。受講生は、「挙手」の数や早さによって、受講者集団の中で自分がどれだけ理解できているのかを知ることができると同時に、集中して授業に参加しなければいけないという一定のプレッシャーを受けるものと思われる。

### 3 おわりに

以上、簿記の遠隔授業に関する私の雑感を述べてきたが、最後に、今後の課題に触れてみたい。まず、オンライン授業では、いかに緊張感を演出し、受講生にプレッシャーを与えるかが重要であると思われる。緊張しながら授業に臨むことによって、学習効果は一層高まるものと思われるが、学生に緊張感を与える方法として、上述したもののほかに、どのような方法があるだろうか。これを考えるのが今後の課題の1つである。

また、オンライン試験についても課題がある。時間的制約を設けようが、問題を複数パターン用意しようが、答えを教え合うという不正行為を完全に防ぐことはできない。これに加えて、教科書、配付資料、インターネットやスマートフォンを見ながら問題を解くことを禁止できないという問題もある。さらにいえば、何点なら合格にするかという絶対的基準を設けることも難しい。こういった問題について考え、解決することも今後の課題である。

気づいていないだけで、おそらく他にも課題は沢山あるだろう。どのような課題があるのかについて考えることもまた、今後の課題である。

図1 受講生に配付した授業資料の一例 (その1)

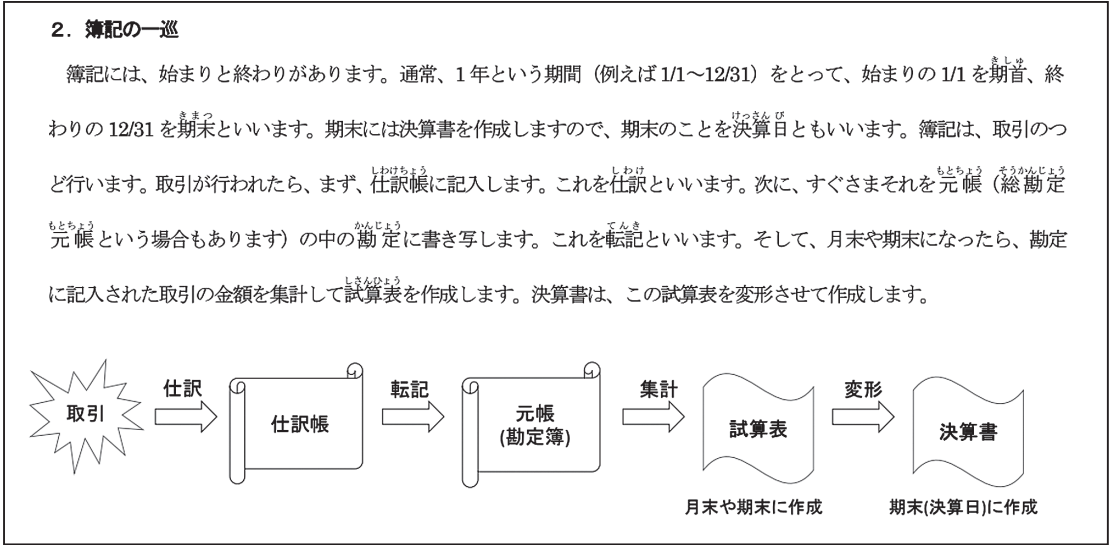


図2 受講生に配付した授業資料の一例 (その2)

**3. 仕訳の覚え方 (教科書4ページ)**

取引は何かを買ったり、売ったりする行為ですから、必ず現金が動きます。現金が動かない取引もありますが、それについては、しばらく扱わないことにします。仕訳を覚えるコツは、現金の動きに注目することです。

仕訳は、次の点線で囲んである文字列の形で行います。左側と右側をあわせて1つの仕訳です。数字の100は、取引の金額を表しています。仕訳の左側と右側には、必ず同じ金額を記入するようにします。

	左 側	右 側
商品を売り上げ、現金100円を受け取った。	現 金    100	売 上    100

仕訳の左側と右側の言葉（現金、売上など）については、次のように覚えます。まず、現金の動きに注目して、現金が増えたなら、左側に「現金100」と書きます。反対に、もしも取引によって現金50が減ったなら、その反対側の右側に「現金50」と書きます。現金が増えた時は左側に、減ったときには右側に「現金」と書くわけです。

現金が100増える場合	→ 現 金    100    ????	100
現金が50減る場合	→    ????	50 現 金    50

次に、????のところには、現金が増加した理由、または減少した理由を書きます。現金100が増加した理由が、もし売上ならば、「売上100」と書けばよいですし、現金50が減少した理由が仕入ならば、「仕入50」と書けばよいのです。たったこれだけです。仕訳って簡単でしょう？

売上による増加の場合	→ 現 金    100	売 上    100
仕入による減少の場合	→ 仕 入    50	現 金    50

図3 作成したYouTube動画のサンプル

